

Title	Mystery Plays に見られる Herod 像
Author(s)	宮川, 朝子
Citation	Osaka Literary Review. 10 p.78-p.93
Issue Date	1971-10-15
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25708
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Mystery Plays に見られる Herod 像

宮川朝子

聖書のお話をわかりやすい劇にして示すことによって、聖書のお話を民衆に伝えるということが、Mystery Plays の最初の目的であり、従ってその存在理由でもある訳で、これはすべての cycle にわたる当然の枠組である。けれども、各 cycle は、聖書のお話に関して独自の解釈に従った特徴ある drama を描き、その結果、お互いに異なった drama ができあがることとなった。

The Slaughter of the Innocents はその一つの例である。マタイ伝 II 16—18をもとにして、各 cycle が様々な思想や感情を夫々の Herod 像に投影させて、独自の drama を作りあげているのである。

Herod は或る意味では最も人間的な人間であり、この王の姿を通して中世の人間観の一端でも探ることができれば、というのがこの小論の願いである。ここでは、Mystery Plays の中で最も重要と思われる4つのグループ、The Chester Plays,¹ The Coventry Plays,² The York Plays,³ The Towneley Plays⁴ を対照とする。

1. The Chester Plays の Herod

予言者から、将来その国の王となるべき人が誕生したと知らされ、Herod は怒りと不安で我慢ができない。その赤児を直ちに探し出し、捕えて来るように一度は命じるが、どれがその子どもであるのかわからないことに気付くと、断固、すべての幼児を殺してしまうように兵士達に命じる。命令に従って、兵士達は無差別に全部の幼児を殺す。母親達の激しい怒りと嘆きの号泣がきこえる。だが、或る女が抱いていた赤児を兵士が殺

すと、とたんにその女は大声で、今お前が殺したのは自分の子どもでもなくて、実は Herod 王の息子だったのだ、従ってお前は謀反者だと兵士に向って叫ぶ。

こうして息子を殺されて、Herod は始めて王としてではなく、一人の人間としての悲しみを知る。嘆きの余り、遂に彼は死に、devli によって、犯した罪の罰を受ける。Angel が現れ、キリストの無事を祝って drama は終る。以上が荒筋である。

Herod の息子殺害とそれに続く Herod 自身の死という話の設定はむしろ、聖書にはないものである。これについては、H. Craig も伝統的に非常に unusual なことであると認めている。⁵ 明らかに作者は意識的に plot を作り出して、drama の構成を意図したことが汲み取られる。即ち、drama としての plot の展開が見られるのである。

これによって drama 全体及び Herod の性格、或いは兵士の非情さ、又、母親達の嘆きに統一的な意味が与えられることとなった。しかも、Herod の悲しみと死とは、罪と罰のテーマ、またその後に起るキリストの賛歌という、Mystery Plays の持つ正当的役割を果し終えている。これを以下に分析したい。

先ず、我が子を殺された母親の嘆きについて。

Out! out! and woe is me!
theife! thou shalt hanged be!
my childe is dead, nowe I see,
my sorrowe may not cease.

Thou shalt be hanged on a tree,
and all thy fellowes with thee;

All the men in this contree
shall not make thy peace.⁶

彼女達の悲しみと怒りの激しさは、主として二つの意味を持っている。

第一は、Herod の激しい性格に対比できる感情の強さを彼女達に持たせることによって、構成上の均衡を保っているという点である。第二は、

Herod の態度に真向から反対することで、彼にその非を悟らせるに至る、劇的な展開への糸口を作っている、という点である。即ち、観衆にとっては、彼女達の号泣は共感を呼ぶものであり、それが激しければそれだけ、後になっての Herod の嘆きと後悔を自然な process として受取ることができるのである。

そして、子供を殺されて泣く母親の怒りや悲しみが深く激しいことで、Herod や兵士達への一種の復讐を観衆は感覚的に待望むに至る。こうして、次に起る、Herod の息子殺害という、復讐的事件への伏線としての要素が固められるのである。従って、Herod の息子が殺されると、女は、彼はわたしの息子じゃなくて、王様の息子だったのさと呼び、その声には残酷な喜びさえ感じられる。しかも、この殺人行為は、本能的愛憎に基いた、極めて人間的なものとして共感を呼ぶ結果となる。

母親の腕の中の幼児を殺害する兵士の非情さも、非情であればそれだけ、Herod の息子殺害の正当性が認められるという逆説的効果を生み、その意味において、drama 全体から見て、有機的要素を持っている。

更に、Herod 自身についていえば、予言をきいて不安に駆られた彼は、全幼児殺害を命令するが、部下の進言なしに、全く自分の意志で断固として決断し、命令している所は他の cycle の Herod と異なった点である。他の cycle の Herod は意志が弱いか、才智がないか、或いは家来の権力の方がより強いかで、家来の進言によって行動している。しかし、ここでの Herod は非常に激しい感情を持っていて、自らの力に自信を持った、勇ましい王として描かれている。又、権力への強い欲望に貫かれて、彼は激しく闘志を燃やす。

この世には自分の敵に価するものは何もないのだとばかりに振舞った王は、やがて我が子を殺されて、始めて人の世の悲しみを知る。悲しみは悲

痛そのものであり、先に、彼自身の命令で赤児を殺害された母親の嘆きと優るとも劣らない。息子は他ならぬ王である自分の息子だった。絹物を着せ、金銀を身につけさせて、衣服からだけでも王の息子とわかった筈なのにと嘆く。その息子が殺されたとなると、Herod にはもう生きて行く力が残らない。彼はここで全く、王としての地位を捨てて裸の人間として、一人の父として嘆く。

Alas! what the devill! is this to mone?

alas! my days be now done.

I wott I must dye soone,

for damned I must be.

My legges rotten and my armes;

I haue done so many harmes,

that now I see of feendes swarmes

from hell cominge for me.⁷

その哀れさはむしろ共感を呼ぶ。Herod は子どもを殺されて始めて、王としてではなく、一人の人間としての立場を問われるのである。ここに至って、彼は子どもを殺された親の悲しみを他の親達の上にも見ることができ、自分の行為の非を悟る。そして彼は悔い改め、死によって罪に対する罰を受けるのである。

最初、予言者からキリストの出現を知らされた時、Herod は激しく怒って自らすべての幼児の殺害を決意し、それを直ちに兵士達に実行させた、それと同じ激しさと一徹さが、今度は悲しみと悔い改めに作用する。つまり、この深い悲しみと後悔とは、かつての彼の勢いの良い勇ましき、強くあることの自信や誇りを前提としてこそ、生き生きとした迫真性を持って来るのだが、その意味で、この Herod の性格は、drama 全体から見た場合、有機的な統一性をもって描かれているといえよう。

また、王の悔い改めとその死によって、The chester Plays の目的として

いるものもはっきりして来る。即ち、悪の行いに対する神の正しい裁きというテーマである。

一般に Mystery Plays の中でも The Chester Plays はひときわすぐれていると評価されるが、この作品に関する限り、その評価も当を得ているであろう。その第一の理由は、plot の展開に見ることができる。聖書の精神をこの作品はよく伝え得ているが、それは単に聖書の引き写しに終わっているのではなくて、drama としての plot が重視され、そのため、話の筋といういわば表面的な問題に関しては、いったん聖書から離れ、そのことによって、実は却って、聖書の精神を生かしているのである。次に触れる The Coventry Plays や The York Plays の作品と比較すれば、一層明らかになるであろう。

第二。Herod の怒り、母親の嘆き、Herod の嘆き等々、夫々の場面は迫真的であり、観衆の深い共感を呼ぶ。神の教えという枠を超えて、人間的共感を呼ぶのである。

むろん、このような Herod の性格を全く現代的な視点でのみとらえることは当を得ない。即ち、Herod の勇敢で強い性格は、中世の数ある物語中の王の一典型であり、彼がその誇り高い王の位置から一転して不幸のどん底に落込み、悲劇的な最後で終るという筋書も、中世的思想感情のきわめて普遍的なあらわれと考えられる。王侯の運命の有為転変の姿は既にありふれたパターンであり、一方、ひとを裁くということの基本的感情として復讐心が波打って働いていたことも考慮されなければならない。むろん、その感情は中世独特の正義感で裏打ちされてはいたのだが。更に罪と罰との境界線がはっきりと引かれ、その結果、罪をあばいて責め立て、平然として過酷な罰をくだし得るといふ、一面の冷酷さは、中世人一般のものであった。

Herod がひとたび罪を犯し、やがて“神の裁き”を受けてからは、彼はもはや王にして王ではなく、不幸のうちに死んで行く姿を見て、おそら

く観衆は神の正しさを祝って、劇中の Angel と共に喜んだことであろう。Herod の最後があわれであれば、それだけ、観衆の拍手にも熱がこもったことであろう。“神の正しさ”を伝えるにしても、この場合、全く中世的現実感を通してのそれであり、それは、いわば徹底した現実主義に支えられていることが理解されるのである。

F. M. Salter は次のように述べているが、この言葉は至当である。

And the first thing we shall learn is that the religion of those times was a living thing which included all life.⁸

中世の人々がたとえば Black Death のような絶対の脅威、抜き差しならない現実と向き合って暮し、そういう現実性の中から、上記のような drama が生まれたことは肯定できるのである。The Chester Plays の作者達は basic truths of life を描きたがっていたのだと Salter は続けて述べている。

Herod の息子が殺害されるという聖書にもない話が登場することもこの観点から説明され得るであろう。これは観衆の復讐的感情の劇化、そして正当化なのであり、それは日常性に立脚した現実主義から出たものと考えられるのである。聖書の解釈というものがその時代、その社会によって、夫々異なったものとなるのは当然であるが、この drama はその良い例を示していると言えよう。

2. The Coventry Plays の Herod

予言者の言葉をきいて Herod は怒り、不安に悩まされる。そして彼は幼児殺害を思い立つ。けれども、Herod の怒りに対して兵士達は全く同意を示さない。Herod は脅迫によって、これを彼等に承諾させる。一方、Angel があらわれて、Joseph と Maria にキリストを連れてエジプトへ逃げるように命じる。幼児殺害後、Herod はキリストの逃亡を知り、怒って彼もその後を追ってエジプトへと出発する。これがあらましである。

部下の兵士達は Herod の計画をきいて、その実行を拒否したが、その拒否も実際はその場限りに終わっていて、劇全体から見て何ら統一的な意味は持たない。Herod も怒りと嫉妬に狂った王という単に典型として描かれているだけであって、個性的な何かをうかがうことはできない。兵士達も Herod も単なる story には参加しているものの、plot がなく、drama 全体が有機的に構成されているとは言い難い。

また、Chester での場合は、Angel が、キリストを連れした Joseph と Maria をエジプトへ導く場面は省かれて、Herod の死後、Joseph と Maria がキリストの無事を祝って Angel の祝福を受けた。それは Herod という悪人がその罪と罰により亡びた後の、真に喜ばしいキリストの出現を一層引立てた。ひとたび聖書の筋書から離れることによって、却って聖書の精神を生かすことができた例の一つである。これと比較して、Coventry の場合、マタイ伝 Ⅱ13—15に忠実に従って筋書を進んでいることは確かながら、単なる聖書の引写しに終わって、作品が却って訴える力を失っていると言えないであろうか。

むしろ、聖書の精神に触れている個々の場面はあって、それはたとえば、次のような箇所である。

My lorde, kyng Erode be name,
 Thy wordis agenst my wyll schalbe ;
 To see soo many yong chylder dy ys schame,
 Therefore consell ther-to gettis thou non of me.⁹

これは Herod の怒りに対して兵士達が王を諫める場面である。

また、我が子をあやす母親によって深い信仰心はうたわれる。

Be styll, be styll, my lyttull chyld /
 That Lorde of lordis saue bothe the and me!¹⁰

しかし、これも全体的立場から見た場合、その効果も位置も全く部分的で小さく、plot の上の有機的意味は持ち得ない。

以上から、これは明らかにまだ形も内容も十分には整わない primitive な drama であると評せざるを得ない。H. Craig は主として meter の問題を歴史的に考察した上で次のように述べているが、内容の上からもそれは肯定できるのである。

Redactions, revisions, and complete rewritings of mystery plays were extensive and may be said to have been the general rule, but fortunately there are cases in all the cycles, and most obviously in the Coventry plays, where some of the oldest and most primitive parts of the plays were left unchanged for centuries.¹¹

3. The York Plays の Herod

Coventry におけると同様、York の Herod は余り魅力的とはいえないようである。

予言に対する Herod の感情は Chester の Herod のような激しい怒りではなくて、漠然と訪れて来る不安という形をとっていて、却って不安の深さが伝わって来る。

最初の不安は次のような漠然とした形であられる。

But I am noyed of newe,
 Dat blithe may I nozt be,
 For thre kyngis as 3e knowe
 That come thurgh þis contree,
 And saide þei sought a swayne.¹²

やがて、やって来た使者の報告により、この不安が現実のこととして形を取りつつあることを彼は悟る。

Alas! for sorowe and sighte,
 My woo no wighte may wryte,
 What deuell is best to do.¹³

彼は決して勇ましい王ではないから、予言に対する反応も勇ましいものではない。それが或いは却って、極く普通の人間としての心のいたみを巧みに伝えていると言えるかも知れない。

他の Cycle では、Herod の心の経緯については殆ど重点が置かれてはいないが、ここではむしろ、心理劇と名付けるにふさわしい程、Herod の心の不安がよく語られている。

彼は会議を開き、長老達の進言により、兵士達を派遣してすべての幼児の殺害にあたらせることを決心する。彼には Chester の Herod のように兵士達に有無を言わせないで命令に従わせる力もないし、Coventry の Herod のように逆う兵士達を威して従わせる強さもない。気弱で狡猾な王らしく、彼は手下の者達の御機嫌を取ることによって、自分の計画に参加させようとする。

Sir knyghtis, curtayse and hende,
 Dow ne nott bees nowe all newe,
 3e schall fynde me youre frende,
 And 3e pis tyme be trewe.¹⁴

狡猾に立ちまわるという点では、更にはっきりと態度で示しているのが、後で述べる Towneley の Herod である。そこでは、Herod は褒賞として与えるべき品物を具体的に知らせ、兵士達はそれを目当てに彼の為に幼児殺害を行う。

ところで、The Towneley Plays の多くは最初は The York Plays から変化、発展して来たものである。従って、The Chester plays や The Coventry Plays におけるのとは違った Herod 像がここに描かれていること、そしてその Herod 像は York にあっては、未だ、はっきりとその個性をあらわしてはいないが、The Towneley Plays の Herod に至って、同一類型として明確な姿をあらわしている、ということは注目すべき問題を含んでいる。

こうして彼は、決していわゆる王らしい王ではなかった。けれども、drama 全体から見れば、それを一つの個性として、それを軸にして drama を完成するということがなされず、Herod はキリストが逃亡したことを知って、そそくさとその後を追うことで drama は終わってしまっている。前述の如く、予言をきいた後の Herod の不安の高まりは入念に描かれてはいる。しかし、この粗末な結末に対してその入念さは何ら意味を持たず、従って断片的な story の並列に終わってしまった。同様に、気弱な王の性格も、もはやそれ以上は追究されないのである。

更に、幼児殺害の場面について見ると、

To dye I haue no drede,
I do þe wele to witte,
To saue my sone so dere.¹⁵

という言葉には母親の必死の愛情がこめられていて、悲痛な心情がよく語られているばかりでなく、

Allas! þat we wer wroughte,
In worlde women to be,
Þe barne þat wee dere bought,
Þus in oure sighte to see
Disputuously spill.¹⁶

という母親の言葉によって、悲しみは償われている。兵士の行いがどのように残酷であり、母親の嘆きがどのように深いものであっても、ここに聖書の精神が生かされたことになる。しかしながら、全体的立場から見れば、この場面も、他の場面との有機的なつながりを持たず、各々がばらばらな儘に終わっていることは認めねばならない。

この作品は部分的には聖書の語るところを代弁し、部分的には Herod の悪の性質を示して The Towneley Plays の Herod の先触れとなっていることが理解される。いずれの問題も完成が試みられない儘、作品はあ

つけない結末を迎えているが、The Towneley Plays への過度的な作品という意味での考察は与えねばならないであろう。

4. The Towneley Plays の Herod

予言者の言葉をきいて、Herod は会議を開く。Consuls の進言により、全幼児殺害を計画する。その実行に当って、Consuls に金銀財宝の褒賞を出すことを条件とする。彼自身は全幼児殺戮を思いつく程の才智も勇気も持っていない。しかし、手下の者達にこれをすすめられると、たちまち喜び、彼等に莫大な褒賞を約束するのである。

Now thou says heretyll

A right nobyll gyn.

If I lyf in land good lyfe, as I hope,

This dar I the warand — to make the a pope.

O, my hart is rysand now in a glope!

For this nobyll tythand thou shall haue a drope

Of my good grace :

Markys, rentys, and powndys,

Greatt castels and groundys ;

Through all sees and soundys

I gyf the the chace.¹⁷

こうして、Herod 自身は権力欲が強いだけで才智も力もないが、富と権力は持っている、それを操ることを知っている狡猾な王であることが、ここで暴露される。彼は長い前口上で、自分がどんなに偉大な王であるかを大言壮語で示したが、実は利己的で、冷酷で、計算高い、一人のちっぽけな人間に過ぎないことが逆説的に暴露される。

やがて殺戮が行われ始めると、母親達は腕力をふるって抵抗する。そこには The Towneley Plays 独特のいつもの喜劇調さえ、かいま見るこ

とができる。しかし、頼まれた仕事を果してしまうと、兵士達は直ちに王の所に行き、褒賞をくれるように迫る。むろん、殺された赤児やその母親の嘆きには目もくれず、お互い、どのように徹底的に殺害をやり逐げたかを自慢し合って、王から得るべき褒賞をより高価なもの、より多いものにして競う。彼等にとっては、それだけが関心の的である。母親達の嘆き悲しむ姿を眼前にして、次のように話している。

1 Miles. I am best of you all, and euer has bene ;

The deuyll haue my saull bot I be fyrst sene!

It syttys me to call my lord, as I wene.

2 Miles. What nedys the to brall? Be not so kene

In this anger ;

I shall say thou dyd best ——

Saue myself, as I gest.¹⁸

(Aside.

ところで、Mystery Plays の当初の目的が、神の正しさを示すことにあったとすれば、既述のように、The Chester Plays の Herod は自ら亡びることによって、その目的を果したが、The Towneley Plays の Herod においては、その目的は等閑に付されていると考えざるを得ない。彼はあくまで、権力欲を持ち、現実のこの世に執着を持った人間であって、最後まで、反省や悔いは微塵も見られない。

I sett by no good, now my hart is at easse,

That I shed so mekyll blode. Pes, all my ryches!

For to se this flode from the fote to the nese

Mefys nothyng my mode —— I lagh that whese!

A, Mahowne,

So light is my saull

That all of sugar is my gall!

I may do what I shall,

And bere vp my crowne.¹⁹

この作品は、むしろ、人間の持っている尽きることのない現世的欲望、たとえば、権力や富へのあこがれといった、或る意味では最も人間的な本質の一つを描こうとしているといえようか。殺された幼児の霊も、母親達の悲しみも遂に救われないままに、Herodの繁栄ぶりを示して drama は終わっている。ChesterのHerodのように、彼は決して罰を受けることはない。また、殺害を実行した兵士達も、金銀財宝を貰って喜ぶという、現実的結果を得るのみであって、神の裁きなど受けはしないのである。

キリストが Angel の導きにより、Joseph と Maria に連れられて、エジプトへ逃れ、無事殺害を免れたということすら、全く触れられてはいないのである。

中世において、人々がどんなに食欲に現実的欲望を追い求めたか、それはむしろ、我々の想像をはるかに越える程、激しいものだったに違いない。多くの災害、病気、貧困、搾取に脅かされて、却って彼等の生への執着、富に対する欲求は強烈なものとなったであろう。“神の正しさ”もさることながら、そのほとぼしするような生命力が現世的衝動をかき立てたことであろう。

Mystery plays が最初に上演されて以来、既に久しい時を経²¹、劇の制作者や上演者もすっかり教会を離れて俗人の手に移った当時において、こうした Herod 像が描かれたことには誠にうなずけるものがある。

No kynge ye on call
Bot on Herode the ryall,
Or else many oone shall
Apon your bodys wonder.²⁰

という Herod のラスト・シーンでの言葉からは、彼の不敵に笑う顔や姿が彷彿とするような、悪に徹した者のすさまじい気迫が描かれる。

むろん、権力を持った者が絶対者として君臨し、権力をほしいままにして、悪に徹するというテーマは、The Towneley Plays においては、こ

の作品に限ったことではない。『*Conspiracio*』における Pylate、²⁰ 或いは『*Coliphizacio*』における Cayphas などに、そのような性格を見つけることができる。また、権力者ではないが、現世的欲望に徹して生きるという点では、『*Mactacio Abel*』の Cain をあげることができる。だが、わけても、見事に描き尽くされているのは、この Herod であると指摘することは許されるであろう。我々は、ただ、彼の迫力に魅せられるばかりである。

H. Craig は meter の問題から論じて、『York』の Herod は古くから York にあった作品そのまま、改作者の手を経ておらず、Towneley の Herod は Wakefield=Master の手によって改作されたものであると断じているが、それは内容の面からも肯定されることは、以上に述べて来た York と Towneley の Herod 像の違いによって確かめられるであろう。

The Towneley Plays 中に見られる幾人かの個性的な主人公や独特の drama の展開、即ち、必ずしも聖書の精神を生かしていないで、自由奔放に人物像を作り、story をすすめて行くやり方、その他、meter に関する実証的研究の結果などからいって、一人の才能ある、個性的な作家が The Towneley Plays のうちの幾らかの作品を作ったのではないかとする考え方は、今や、Mystery Plays 研究者達の一致した見解である。その個性的な作家 —— Wakefield=Master と呼ばれている —— がわけても生き生きと描きあげた代表作として、この作品を選びたいものである。

こうして、The Chester Plays の勇ましくも強くもありながら、悲劇的な死を遂げた王と、The Towneley Plays のちっぽけな人間に過ぎないながら、巧みに権力の座にあり続ける強欲な王の不敵な笑いとは、それぞれ異なった人物像ながら、そのいずれもが、我々人間の真実の姿を描いたものとして、時代を超え、Mystery Plays という枠を超えて、深い感動を呼ぶのである。

注

1 おそらく、1328年に上演されたのが最初だと考えられている。本論

で text として使用するものは1600年頃校訂されたとされている。The Chester Plays はイギリスではおそらく最も古い Corpus Christi Play であろうが、他の Mystery Plays が幾たびか何人かの手によって校訂が加えられたり、書きかえられたりしているのに比して、余り元の形を失わずに現在に至っている。

- 2 いつから上演され始めたか正確なことはわからない。一説では1445年とされている。現存しているのは2篇であり、E. E. T. S. には1534年に校訂したものを採用している。
- 3 1328年頃が最初の上演であったとされている。E. E. T. S. では1583年に校訂したものを採用している。
- 4 York 市のすぐ近くの Wakefield で The York Plays をそっくり借りて来て上演したのが始まりである。1400年から1450年位の間のことと考えられる。であるから、最初は The York Plays と全く同一のものであった。しかし、やがて、それぞれの cycle は別々の道を歩み、多くの変化があって、逐には異なったものとなって行った。The Towneley plays はおよそ三つのグループに分けることができる。一つは、The York Plays のうちの或るものが、その儘保存されて残ったもの。別の一つは、York においても Wakefield においても、別々にそれぞれが revision を受けて、お互いに異なったものとなった場合。三つ目は、York ではその儘の形で保存されているのに、Wakefield でだけ改作された結果、お互いに異なったものとなった場合。本論で取扱う作品はこの例であろう。そしてこの場合の改作者を一般に Wakefield Master と仮称している。
- 5 Hardin Craig, *English Religious Drama of the Middle Ages*, (Oxford University Press, 1967, First Published in 1955), P. 189
- 6 *Slaying of the Innocents* in the Chester Plays, E. E. T. S.,

- ll. 345—352
- 7 Ibid. ll. 417—424
- 8 F. M. Salter, *Medieval Drama in Chester*, (Russell & Russell, 1968, First Published in 1955), P. 103
- 9 *Pageant of the Shearmen and Taylors* in the Coventry Plays, E. E. T. S., ll. 793—796
- 10 Ibid. ll. 835—836
- 11 op. cit., P. 163
- 12 *The Massacre of the Innocents* in York Mystery Plays, ed. by L. T. Smith, (Russel & Russel, 1963, First Published in 1885), ll. 41—45
- 13 Ibid. ll. 136—138
- 14 Ibid. ll. 163—166
- 15 Ibid. ll. 204—206
- 16 Ibid. ll. 226—230
- 17 *Magnus Herodes* in the Wakefield Pageants in the Towneley Cycle, ed. by A. C. Cowley, (University of Manchester, 1958), ll. 260—270
- 18 Ibid. ll. 406—412
- 19 Ibid. ll. 469—477
- 20 Ibid. ll. 501—505
- 21 注1, 4を参照の上、上演年代の違いに注意。